



福祉見てある記 ③⑤

フィンランドの 福祉としての教育

私は2006年6月12日から19日にかけて、フィンランドの教育現場（エスポー市教育委員会・エスポー市立小学校・ツースラ市ディケアセンター・フィンランド女性組織評議会・ハウレッカ子どもセンター・ニコラ養護学校・フィンランド教育委員会）の視察と関係者のインタビューを行いました。フィンランドは、2003年に実施された「経済協力開発機構（OECD）生徒の学習到達度評価」（PISA2003）において、すべての項目でトップグループに位置しており、「学力世界一」として注目を浴びました。調査の詳細は海外事情研究所所報で報告する予定なので、ここでは調査の結果明らかになったフィンランドの教育の優秀性の背景を簡潔に紹介したいと思います。

フィンランドの教育の優秀性の背景は、選別をしない平等な教育、子ども自らが学ぶ教育、専門職としての教師、福祉としての教育の4点にまとめることができます。

まず、選別をしない平等な教育です。フィンランドの教育は、もともと11歳の段階で大学進学をめざす子どもと実業学校で学ぶ子どもを選別する制度でした。しかし、1960年代

に福祉国家が確立し、70年代には総合制学校へと転換していきました。これに伴って選別が廃され、異なる能力や障害、その他の属性を持った子どもが同じ学校で学ぶようになりました。私が見学したツースラ市ディケアセンター（日本の幼稚園）では、重度の障害を持つ子どもも一緒に学んでいました。また養護学校も、地域の学校の中になり、日本のように特別な学校に分けられているわけではありません。ただ私が見学したニコラ養護学校では、地域の学校の中で障害児のクラスは明確に分けられており、「場の統合」は進んでいるが同じ教室で共に学ぶ「個の統合」は進んでいない様子がうかがえました。

第2は子ども自らが学ぶ教育です。フィンランドの教育は、学習とは知識の受容ではなく、知識を探求し構成する主体的かつ社会的な活動であるという社会構成主義的学習概念に基づいています。このような考え方から、フィンランドの教育方法の基本は、一人ひとりの教育課題をグループ学習を通して達成し、それを教師が支援する仕組みです。日本のような一斉授業や強制的に教え込むような教育はありません。子どもたちは主体的に読書し、考え、学びます。学ぶこと、知ることの喜びを基礎にしているのがフィンランドの教育の特徴だと感じました。

第3は専門職としての教師です。フィンラ

ンドでは教師は「kansankynttila」（国民のロウソク）と呼ばれ、大変尊敬されています。基礎学校（日本の小中学校）の教師も修士号取得が義務付けられており、大学教員と同様、教科書を選定したり、教育内容を決定する大幅な権限を持っています。教師の仕事は、45分授業を週26時間分行うことです。それ以外の時間は、授業に向けての研修と位置づけられており、教師は自由に時間を使うことができます。だから、低学年担当の教師は12時頃に帰ってしまうこともあり、多くの教師は午後2時頃には帰宅するとのこと。私が出会ったフィンランドの先生方は、自分の仕事に自信と誇りを、そして何よりも余裕を持っているように感じられました。

第4は福祉としての教育です。フィンランドでは、給食は幼稚園から高校まで無償で提供されます。また学費も大学まで無償であり、自宅外で学ぶ学生には支援金も給付されます。学校では、さまざまな問題を抱えた子どもたちのために、スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラーが配置されており、授業が始まる前後のアフタヌーンケア、モーニングケアやクラブ活動にはそれぞれ専門のインストラクターがあたります。また障害を持つ子どもなどへの特別教育にも力を入れており、5.7%の子どもがフルタイムの特別教育を受けており、約20%の子どもがパートタイ

ムの特別教育を受けています。個別の指導計画に基づいて、すべての子どもに基礎学力を保障することを目指して教育が行われているのです。

このような、努力の結果、フィンランドでは、平等の追求を通して高い質を達成するということが行われてきました。フィンランドに学んで、福祉としての教育という考え方の下、すべての子どもたちの人権を保障する教育をつくり出すことが、日本の教育問題を解決する唯一の道ではないかと私は思います。

堀 正嗣（本研究所研究員 障害学）

